

静岡茶を考える会

代表：大國 田鶴子

お茶マップ作り&交流集会「お茶に恋した女たち」

実施日時：平成24年11月7日（水）13:30～16:00

実施場所：茶町 KINZABURO

参加者：33人

連携・協働団体：SWOSの会・茶町 KINZABURO・エコハウス静岡
静岡YWCA

1. 事業目的

地場産業であるお茶の振興をはかり、またそこに働く女性に光を当てる。

中心街のお茶マップを作成、そこに登場する茶業界の女性と一般消費者とが交流し、お茶への関心・お茶にかかわる女性の働きへの関心を深めてもらう。

2. 事業内容

事業内容：お茶マップ作成と完成後に交流集会

実践日時：お茶マップ作成 8～10月 11月1日発行

交流集会(茶講座) 11月7日（水）13:30～16:00 茶町 KINZABURO

3. 事業の実績

①お茶マップの作成

「女が輝くお茶の町 すんぷ お茶MAP」と題して、静岡中心街地の茶関連の店25店を取り上げ、そこで働いている女性を紹介し、お茶という地場産業を女性の職場として見直すきっかけとした。また、女性の視点からの商品紹介も加えた。

2000部作成し、掲載店・市観光協会・図書館などに置いて、県民や観光客に配布した。

②交流集会「お茶に恋した女たち」開催

- ・会場 静岡市葵区「茶町 KINZABURO」
- ・日時 11月7日（水）13:30～16:00
- ・参加 33人
- ・講話 前田純代（茶町 KINZABURO）・大蔵春江（小山園本店）

小売りの現場で働く女性から話を聞くとともに、前田富美男さんによるお茶のミニ講座・静岡県産茶の飲み比べ・茶工場の見学など、多角的にお茶を学ぶ機会を提供した。

4. 事業の効果

①お茶マップは各種出ているが、「女性の視点からお茶をとらえ直す」というアイデアが新鮮であると、配布先から評価された。

②お茶講座では、女性の個人史と茶小売りの変遷が重ねて語られ、地域史と女性史がクロスする地点としての茶産業を考えるきっかけとなった。

私たち「静岡茶を考える会」は数年前からお茶について学び始め、あちこちの産地を訪ねたり、お茶を飲み歩いたりした。大間の茶畑を借りて、お茶づくりの体験もし、山間地農業の厳しさもお茶づくりの面白さも知った。お茶は本当に奥が深いし、いろいろな文化にもつながっているし、第一おいしい。

が、地場産業としてのお茶についていろいろ語られてきた中で、そこで働いている女性についてはあまり取り上げられてこなかった、ということにも気づかされた。お茶農家を支えているのも女性だし、お茶摘みはもちろんほとんどが女性、小売りの現場も女性が多いし、消費者として考えても実際に購入するのは女性が主体だろうと思われる。

そういう視点から、女性を通して静岡のお茶を見直すようなこと、小売りで働いている女性と消費者である女性とをつなげることがやりたいと考えてきたが、今回の地域協働事業の助成金をいただいたことで、思いがけずそれが実現できた。事業はお茶マップの作成とお茶講座の二本立て、つまり、資料として後々まで残るものと直に話を聞く催しの2種類にした。

■マップづくり

静岡市中心街でお茶を扱っている店をピックアップする作業から始めた。掲載できる数は限られているためセレクトが必要だったからだ。とにかくまず女性が表に出ている店、ということで選び、それに新しい試みをしている、多様な製品を扱っている、消費者としての女性が興味を持ちそう、などを考慮して25店に絞り込んだ。

その後ピックアップした店を手分けして回り、客となりながら女性スタッフにインタビューして、女性から見た茶業界や職場の状況、おすすめの商品などの話を聞いた。店により温度差はあったが、それでも大半の店では女性スタッフが活躍しており、私たちの「女性とお茶」をテーマにしたマップづくりに理解を示してくれた。自分の仕事について自負をもち、熱心にいろいろ話してくれる方も多く、短いコメントにまとめてしまうのが惜しいような内容がたくさんあった。

そして集めたデータ・写真とコメントを配置し、マップの版下を作成していった。しろうと写真だったので、せっかくの顔がぼやけがちだったのが残念だったが、なんとか割り付けやデザインも自分たちでやることができた。

ついでに言えば、頼んだ印刷所の担当者も女性だったので、オール女性での制作となった。ミステリー界に4Fという言葉がある。主人公・作者・訳者・主要読者、すべてが女性（Feminine）である作品を言う。このマップもそれに近いものとなったと思う。

出来上がったマップは郵送せず、すべての店にお礼を言いながら手配りした。受け取りに専務とか店長とかの男性が出てくることがあり、「静岡に沢山あるお茶の店からなぜここをピックアップしたのか」の説明に、「今までお茶業界は男中心だったからなあ」という感想を漏らす方もいた。そういう意味では、お茶業界に対しても一定PRになったのではないかと考えている。

お茶という地場産業は、生産の場でも小売りの場でも女性がたくさん働いているが、小規模家族経営の場合、表に出てくるのは戸主たる男性の場合が多い。しかし女性の職場という観点から見れば、また新しいものが見えてくるのではないか。取材の過程では、女性スタッフによる商品開発の成果も幾つかみせてもらったし、これから変わっていく可能性は大きいと思われる。

■「お茶に恋した女たち」

11月7日（水）13：30から、お茶マップにも掲載した静岡市葵区「茶町 KINZABURO」にて、「お茶に恋した女たち」と題し、交流集会（お茶講座）を開催した。

まず茶工場を見学。その後「茶町 KINZABURO」2階のフリースペースで、前田純代さん、大蔵春江さんのお話を聞いた。

前田さんは、この時のために手書き年表を用意してくださった（写真の背景参照）。

そして「お茶問屋のヨメ」という立場から「茶町 KINZABURO」という名の小売店の、店主兼パティシエになるまでの個人史を、結婚・出産後の女性が再び社会参加していく過程として語った。もう一度自分の名刺を持つことがどんなにうれしかったかなど、参加者の共感を呼ぶ話だった。

大蔵さんは、老舗のお茶小売店で30年仕事を続け、現在は本店の店長をされている。気負いなく淡々と働いてきたことが長続きした要因だったのではと、これまでの経過をごくさらりと話された。

その後、前田富美男氏より、各種のお茶の飲み比べ・お茶を使ったお菓子の試食・お茶クイズなどが続き、参加者は多方面からお茶を楽しんだ。

大間でお茶農家の女性に話を聞いたときにも感じたことだが、マップ作成インタビューや講座での話を聞いていると、茶産業にスポットをあてることで、女性史や個人史は地域史と繋がることができる気づかされた。今までの女性史では、女性の社会的地位向上などが主要なテーマであったが、そこにもうひとつ、地域産業・地域経済との係わりを付け加えられるのではないか。そうすることで、もうひとつ奥行きのある歴史を紡ぐことができるのではないか。そうした視点を得られたことが、今回の一番の収穫だったと思う。



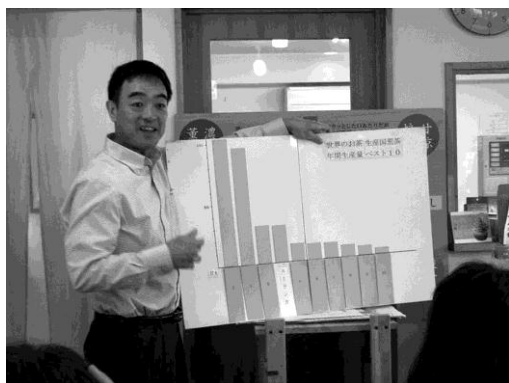
お茶工場を見学する参加者



年表を前に話す前田純代さん



小山園の大蔵春江さん



前田富美男さんのミニ講座



熱心に耳を傾ける参加者

元気のなくなった静岡茶業界を消費者として後押しできないかと、仲間と勉強会を始めてそろそろ10年になる。茶農家とかかわりを持つのが一番と、限界集落で茶作りを行っているが、ふと疑問に思った。実は生産者ではなく、販売者とかかわらなくてはならないのではないかと。

お茶のおいしい飲み方、急須でのお茶の淹れ方など消費者にお茶のノウハウを伝えるのは、販売者だ。というのに、ペットボトルの快進撃に押されて、お茶販売者は元気がない。「しっかり」と背中を押したい。それに、お茶は“茶葉と急須を使って淹れたい”。ペットボトルではないお茶との出会いの場作りとして、また、男社会の茶業界で女性ががんばっている店を紹介する場として、「お茶マップ」作成が私たち仲間の悲願となっていた。でもねえ、お金が。ところがラッキーなことに、あざれあ地域協働事業としてお金をちょうだいできることになり、ヤッホー。

地図作成には、5人の仲間がかかわった。ほとんどの人が取材経験ナシ。というのに、そこそこ「できるいい地図」になったと、自画自賛しているのだが、いかに。

初めての取材**大石 美代子**

お茶マップなるものを作成するにあたって、お茶に関連するものを取り扱った7店舗の取材を担当することになった。

“取材をする”などということは、何しろ初めてのことで、それもすべて営業中のことにお伺いするわけで、少し後ろめたい気持ちがある。何か買い物をした方がよいのか、とか、もう少し時間帯をずらしてお店が暇なときがよいのか、とか……。頭にいろいろな考えが浮かんできて、どうしても腰が引けてしまう。おまけに決められた期限までの日数は短く、年老いた両親を見ながらなので思うように時間がとれない。そんな中、残暑の日々を行ったり来たりの取材が何とか終わった。

10月、ついに出来上がったお茶マップを手にした。美しい新茶いろで紙も上質、照りがあって厚さもあって、とてもいい。前回の手作りマップより格段の差の出来栄。これも今回、あざれあの助成金のおかげと感謝した。また何と云っても、今まで自分たちがしてきたことが、お茶マップという“形”として現れたのがとても嬉しかった。

いつもいろいろな場所で、パンフレットや小冊子などを気軽にいただいてきたが、今までとは全く別な視線で、別な角度から見る目が備わったような気がした。

一枚のパンフレットの裏には、いろいろな人の努力があって成り立っているのだ。これからは心して手にしようと思う。

“初めての取材”のおかげで、この年になって、新しい、ありがたい経験ができたことを感謝している。



静岡茶を考える会のメンバー

先ず、「いらっしゃいませ」！の声で気分がよくなる。

どこのお茶屋さんの女性も「静岡茶」が大好きで、誇りを持って働いている、ということを感じた。自店での販売茶の特性を心得、お客様が欲する好みを理解し選択できるようなアドバイスとマナーを持ち合わせているとも感じた。

お茶マップの取材の感想

鳥居 千春

数年前に公民館の講座で、“お茶を通しての町おこし”をテーマに、茶の生産、流通、消費を学んだ。その時からかかわりが生まれ、この茶マップ作製につながった。

取材のコツなどわからないので、相手の話を聞き出し、それをまとめて文字化するには一回の訪問では足りず、2回行くこともあった。その上顔写真を撮るのがむづかしい、みなさん素敵にとってほしいと思うのが人情ですから。とはいえ、10年20年とお茶をお客さんに勧める仕事をしてきた方たちは、それぞれ個性があり仕事熱心です。

茶町 KINZABURO での前田夫妻の話は、人気があるこの店が出来てきた過程がよく理解できて面白かった。男女共同参画の企画にぴったりでした。

